
皇帝微笑

真濃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

皇帝微笑

【コード】

N6121W

【作者名】

真濃

【あらすじ】

『笑う皇帝』シリーズ1【運命の出会い編】

皇帝微笑（1）

「余はもうすぐ死ぬ……」

豪華で壮麗な、透かし彫りの天蓋つきの寢所に、男は横たわっていた。

天井から垂らされた最上質の織布には、この国を統治するアリエス家の紋章が、銀糸で刺繍されている。

ニールセン・アリエス。それが男の名だ。

一年前に、十七歳にしてこの帝国の四代皇帝の座に就いたばかりだった。

そして先日、十八歳になった。

「朝っぱらから何つまらないこと言ってるんですか。さっさと朝ご飯を済ませてください」

ニールセンの教育係である側近の老君が、ピング・バックスである。この少年は、その口うるさいピングの孫にあたる、ロビン・バックスだ。

ロビン少年は二つ年下であるが、ニールセンの影武者として幼少の頃から兄弟のように育てられてきた。

ときに毒見役、ときに小間使い、ときに影武者。

運ばれてきた朝食のワゴンを、ロビンは手早く寢所のそばまで移動させた。

そしておもむろにスープを飲み、柔らかなパンをちぎって口に押し込んだ。

「ふおら、毒なんてふあいつてまふえんよ。ニール様、どうぞ」

毒見という量の範疇をいつも超えている。ニールセンはいつだって、このロビンの食い散らかした後を片付けているようなものだった。

た。

これでは食欲など出るはずもない。

どうぞと言われても、到底起き上がる気にはなれない。

ロビンはいつまでも寢所でくすぶっているニールセンに、いつものごとくてきぱき指示を出す。

そのやかましきは祖父譲りだ。

「今日はニール様の皇后様をお迎えする大切な日ですよ。今日は祝典用の正装に着替えてもらいますからね」

「だから、余は死ぬと申しておろう」

生まれながらにして皇帝の地位を約束されてきたニールセンは、大切に育てられたがゆえ、俗世間のことなど何も知らず、人付き合いが苦手だった。

それを頭の固い元老院の長老たちは「皇帝たるもの后を娶りお世継ぎを誕生させてこそ一人前」と、ニールセンの知らぬところで勝手に話を進めてしまったのである。

「そんな、顔も見たことのない氏素性の分からぬ娘など……」

そう言っただけでニールセンは起き上がるどころか再び掛布にくるまり直した。

ロビンはため息をつきつつ、織布をかき分け寢所に入り込み、ニールセンの上にまたがるようにして、無理やり掛布を剥がしにかかる。

「何言ってるんですか、まったく。隣国の王のご息女は、それは大変な美貌の持ち主だって話じゃないですか。まあ、ニール様はやかまれて刺されちゃったりすることはあるかもしれないですけど」「ニールセンも負けじとロビンの手から掛布を取り返そうと、必死の形相だ。

日の光を長時間浴びたことのない、抜けるように白い顔肌。猛々しさとは無縁だが、皇帝アリエス家の血統に相応しい品格のある美しい顔の造りだ。

「余の命を狙っているに決まっておろう」

しかし性格はいたって悲観的。権力者ゆえの命の危険や不安を、生まれながらにして持つてしまった宿命なのであろうか。

決してそれだけではあるまい。命の危険さなら、影武者のロビンのほうがずっと高いはずだ。

掛布の取り合いが続く。しかしもう裂ける寸前。ロビンは仕方なく手を離れた。

裂いてしまったら、皇帝寝室係のものに文句を言われるのはもちろんロビンだからだ。

力づくは諦めて、ロビンはニールセンの寝所から下りた。そして掛布に包まれたニールセンの顔の真上から、大きな声で嫌味を言った。

「そのニール様の疑い深い神経というか妄想癖？ 何とかしないと皇后様に嫌われますよ？」

わずかに反応した。効果ありの様子だ。

すると突然、ニールセンは自ら掛布をはいだ。ロビンと至近距離で見つめあう。

ニールセンの目は怯えている。

「そうでなければ、その美貌とやらで余をたぶらかしてこの国を乗っ取るつもりなのじゃ」

「ハハッ、それなら、陛下がたぶらかされなければいいだけの話、でしょうに？」

二人しかいないはずのニールセンの寝室に、よく通る男の声が響いた。

驚いて、声のする寝室入り口を、二人は同時に振り返った。

するとそこには、灰色の第一礼装を身につけた貴族の男が立っていた。

非常によく知っている人物だ。

「ヴェインレット！？」

「あ、おはようございます、アイゼン公」

ニールセンはその男の姿を自分の目ではつきりと捉えると、同じく寝所のそばに驚き立ち尽くしているロビンの腕を、強引に引っ張った。

そして聞こえるか聞こえないかくらいの声量で、まくし立てるように言った。

「勝手に城内に入れるないつも申しとおろう！ 余の地位を狙う一番の危険人物ぞ？」

ニールセンは必死だ。

ロビンは困惑を隠せない。いくら皇帝の側近の孫だからといって、ニールセンだけに肩入れするわけにはいかないほど、やってきた男は地位の高い人物だからだ。

「そ、そんなこと言われても、皇位継承権一位のお方に立ち入り禁止などと言える人間は、この国にはおりませんよ」

「おのれは、皇帝である余に対しては慇懃無礼な態度のくせしてか！？ その口は何のためについておるのじゃー！！」

ニールセンは寝所から飛び下り、ロビンの頬を思い切りつねると、そのまま寝所の中へと投げ込んだ。

皇帝、ご乱心。

ヴィンレット・アイゼンは嫌味なくらいの優雅な笑顔をニールセンに向けた。

「ご機嫌麗しゅう、皇帝陛下殿」

ニールセンは顔をそむけたまま、寝室内に置かれた皇帝専用の絢爛な椅子に腰掛けた。

謁見の間にある玉座よりも二まわりほど小さいが、一般的な椅子よりは大きく、はるかに豪華で美しい。

夜着を羽織ったまま、ニールセンは肘掛にもたれふんぞり返った。そして歳の変わらぬ目の前の若き青年に、はき捨てるように言い放

つ。

「麗しいどころか、おぬしのせいで斜めに傾いておるわ！ 何用ぞ？ 余に用事がないのであれば早々に立ち去るがよい」

ニールセンの毒舌も、このヴァインレットにとってはどこ吹く風。優雅なため息を一つ吐いてみせる。

「相変わらずつれないことを。同い年とはいえ、僕は陛下の叔父なんですよ？ もう少し敬いの気持ちを持ってくださってもよいと思うのですが？」

ヴァインレット・アイゼンは、ニールセンの父である先帝の弟にあたる人物である。

随分と歳が離れた兄弟だったため、叔父と甥が同い歳という奇妙な間柄なのだ。

その事実が、ヴァインレットに対するニールセンの敵対心を、一段と助長している。

ニールセンが亡き者になれば、次期皇帝はこのヴァインレット。その鍛えられ引き締まった身体と洗練された身のこなしは、ニールセンが持ち合わせていないものである。

世渡り上手なヴァインレットは、社交界の貴婦人たちにも人気は非常に高い。そして遊び方もよく心得ているらしい。うらやましくないとさえ言え、もちろんそれは嘘。

ヴァインレットは気障つたらしく、きれいに整えられた茶色の短髪をかき上げた。

「皇后様となられるお方には、叔父の僕も当然ご挨拶をしておかなければならないでしょうに。マイシエル公の姫君ときたら絶世の美女と誉れ高いんですよ？ 城にこもりっきりの陛下はご存知ないでしょうけど」

ヴァインレットはゆっくりとニールセンの元へと近づいてくる。

皇帝といえば神と等しい。

貴族の社交場などに顔を出すことのないニールセンにとって、この遊び人の叔父の話はかなり重要なだ。

「……それほどまでに、美しいのか？」

ニールセンが興味深げに尋ねる。

その様子を見て、ヴィンレットはこの上ないくらいの愛想笑いをしてみせた。その笑顔の奥には、何が隠されているやら。

「そりゃもう。微塵の欠点もないんですよ。陛下が娶りたくないのであれば、僕が貰い上げますよ。マイシエル公は借金のかたに姫君を差し出すわけなんだから、僕がそのお金を出せば文句はないですよっ？」

若くして大貴族の当主となった苦勞知らずのヴィンレットは、この皇帝に次ぐ財力の持ち主なのだ。

アイゼン公と名乗っているが、れっきとした皇帝アリエス家の血筋だ。

しかし。

「ならぬ、ならぬ、ならぬ、ならぬわ！」

ニールセンは声を荒げ、勢いあまって立ち上がった。

「無理やり結婚させられるのは嫌じゃが、おぬしに取られるのはもっと嫌じゃ。絶対に嫌じゃ。嫌といったら嫌じゃ」

あまりに興奮してしまったのか、ニールセンはすっかり息が上がっている。深刻な運動不足だ。

その激しい剣幕に、ヴィンレットは目を丸くしていたが、やがて何でもないとといった風に肩をすくめてみせた。

それまで、皇帝とその叔父貴族とのいつものやり取りを傍観していたロビンは、やれやれと微笑んでみせた。

結局は、こうなるのだ。

「あ、ようやく乗り気になってくれたんですね、ニール様」

上手く丸め込まれてしまっただけが悪いのか　ニールセンは咳払いを一つした。

「顔くらい見ても……よからう」

ニールセンはヴィンレットの前を横切り、用意されていた祝典用の正装に着替え始めた。細かな装飾品は、あとで衣装係が付けたことになっている。

銀と白の地に、青い線が幾筋も縫い込まれている。胸には皇帝アリエス家の紋章。

皇帝のみにその着用を許された、誉れ高き栄光の座の証。

「余のことを、気に入ってくれるであろうか？」

いくつもある上着のボタンを一つ一つ掛けながら、ニールセンは弱々しく言った。

同じ年頃の娘と話すのは、ニールセンにとって初めてのことなのだ。

自分がどういふ評価をされるのか、不安で不安でしょうがないのである。

しかし、この叔父。

「ははは、陛下。気に入るも何も、向こうには選択の余地はありませんからね。本当、貧乏はしたくないもんですねえ」

ヴィンレット青年の軽快な笑い声が、ニールセンの心を締め付けた。

その原因は、ニールセン自身にも分かっていない。

皇帝微笑（2）

時の権力者に不可欠なもの。
それは何と言っても、頑固で口うるさい「じい」である。お約束中のお約束だ。

特にニールセンのように、生まれながらにして皇帝となることを運命づけられた人間には、至極当たり前のように「じい」が存在している。

今日は一国の一大イベント・婚礼の儀である。

重要度のランクでは即位の儀式、葬礼の儀式について三番目であるが、その華やかさではそれらの儀式の比ではない。

城内はもちろん、城下は異様な興奮と熱気に包まれていた。皇后がやってくるであろう城門から城の前の広場にに至るまで多くの民が集まり、ごったがえしている。

しかし城内は城内でも、皇帝の住まう新宮では、一転して冷め切った空気。

いや、この男だけは別の意味で熱かった。

禿げ上がった頭から湯気を立ち上らせながら。

「陛下！ どこに居られるのですかーっ！」

人気のない新宮の回廊に、皇帝のジイ、ピング・バックスのしゃがれ声がこだました。

もうすぐ皇后が城下に入られることになっている。

少なくとも皇帝はバルコニーへ出て皇后を迎え入れなければ、格好がつかない。

しかし今の皇帝は、今朝になってようやくやる気を出したかと思ったら、直前で『とんずら』してしまったのである。

ニールセンが控えているであろう謁見の間に続く執政室に、ピングがたいそうな剣幕で駆け込んだ。

しかしというか、やはりそこにいたのは。

純白に銀の刺繍の入った皇帝の第一礼装を身に付けたロビン少年だった。

造りのよい椅子に、縄で嚴重に括り付けられている。

「ご丁寧に猿轡も噛まされて、ロビンは苦しげに唸り声をあげている。」

もちろん、皇帝ニールセンの仕業だ。

ピングはいは目の前の光景に思わず目を覆った。

急いで孫の口をふさいでいる布を解いてやる。

「ロビン！ 陛下はどうなされたのだ！」

「す、隙をつかれて逃げられました。」

「このバカ孫が！ お前がわしの血を引いてるといのが情けなくて涙が出てくるわい！」

ふと。

ピングがいは何の気なしに部屋の隅に目をやると、そこには一人興奮するピングを、なんとものん気に見つめている青年。

皇帝と同一年の叔父、皇位継承権第一位のヴィンレット・アイゼンだ。

それは優雅に、帝国名物の花茶なんぞを飲んでくつろぎまくっている。それも、皇帝専用の執政室で。

油断のならぬ男だ。

「まあまあ、ピング。そう興奮なさらずに。こんなところで血圧上がって倒れられても、始末に困りますからね。」

「しゃあしゃあと言っただけのけるヴィンレットに、じいは嫌悪の表情一杯だ。」

母は違えどこの男は先帝の末弟。へたに賢い分、扱いづらいのだ。……これはこれはアイゼン公。口が過ぎますぞ？ それに、この

ロビンが身代わりにされてるのを黙って眺めておられたとは……悪趣味だのう」

じいの嫌味もいつものことと、ヴィンレットは首をすくめて見せた。

「ハハハ、僕だってアイツに脅されてたんですよ？ 騒いだらロビンちゃんの命はないぞ、って」

嘘バレバレだ。ロビンがどうなるうと、ヴィンレットにはまるで関係のないことである。

ヴィンレットは花茶を飲み干すと、カップを音をたてずに置いた。そして、これ以上ないくらいの素適な笑顔を、ピンガじいに向けてやる。

瞳は真剣そのもの。えらく挑戦的だ。

「皇帝陛下がお出ましになられないのであれば、そのときは僕がジル・マイシエル殿を貰い受けますからご安心を。陛下にもさつきそう申し上げましたので、何の問題もありませんから」

「なんと！ 陛下がそのようなことを？」

ようやく縄を抜けたロビン少年が、祖父と公爵の火花を揉み消しに入ってくる。

「何の問題もないって……問題大ありでしょ？ ニール様、アイゼン公に取られたくないって、さつき散々暴れてたじゃないですか」

それなのに、ニールセンがいない隙に、ヴィンレットがジル・マイシエル君を貰い受けるなどという暴拳に出たら、確実にこの帝国は終わってしまう。

どうせなら後腐れなく叔父と甥の刺し違えで、解決して欲しいと皆が思っている。おそらく。いや、きっと。

「じゃあ何であいつは逃げるんだ。そんな、訳の分からないかんしやく起こして逃げられたら、ジル殿もたまったものではないでしょうに」

「とにかくですね、一応、影武者の僕がジル様にお会いして、そのあと事情をご説明しますよ」

ロビンが持ち前の事務処理能力を発揮して、優等生的発言をする。しかし、この若き叔父が引き下がるはずもない。

「選んでもらいましょう」
「ロビンは笑った。」

「ジル殿にどちらがよいか選んでもらえばいいんです。マイシエル家はお金さえもらえれば文句ないでしょうから」

「もう、アイゼン公。無茶言わないでくださいよ……」
「であるなら、わしも立候補させてもらおう」

ピンガじいの突然の言葉に、辺りに沈黙が走る。

そして、ヴィンレットとロビンの声がきれいに重なった。

「はああ？？」

「何考えてるんだよジジイ！」

ロビンは困惑の色を隠せない。

「とうとう、モウロクしましたか……」

ヴィンレットに至っては、まるで汚いものを見るかのような軽蔑の眼差しだ。

「ええい、うるさい。わしだってれっきとした独り者だ。金だつてこの宮殿の中では一番の給金取りだぞ。貧乏家の姫ひとりくらい、たやすいことよ。可愛い妻は男の永遠の憧れ……」

悲しいまでの年寄りの妄想をヴィンレットはさらりと聞き流し、意地悪い笑顔を見せた。そして、片手で頬杖をつき、空いているもう片手を軽く振ってみせる。

「一国の財政を傾けるほどの姫君を？ 宮仕えのじいさんが？ はは、無理無理」

「……いま、何と申された」

ピンガはヴィンレットの嫌味なまでの笑顔を見つめたまま、次の言葉を待っている。

「無理無理、と言いましたが」

「そこではないー！」

「宮仕えのしがないジジイ、ってトコですか？」

「しがないは余計だ！ ではなくて！！」

一人いらだつピンガに優越感を覚えたのか、皇帝の若き叔父君は意気揚揚と語りだした。

「隣国の民が飢えているのは、実はジル殿のせいだ、とね。社交界ではもっぱらのウワサですよ。宮廷にこもっていらっしやるあなた方はご存知ないでしょうけど」

くくくくと、ヴィンレットはそれはおかしそうに笑っている。

ピンガじいとロビン少年は、目を見開き言葉を失った。

なんとということだろう。もしかして、決断を早まってしまったのではなかるうか。見目麗しきことが先走りして、半ば金の力で貰い受けることにしたのだが、一国の財政を傾けた　ピンガの予想をはるかに超えてしまっている。どうなることやら、行く末が恐ろしい。

「ええい、こしゃくな！ わが国に嫁ぐからには質素儉約を叩き込んでやる」

「ああ、なんと甲斐性のない。それでは確実に、ピンガはジル殿に選んでもらえませぬねえ」

「まだそのような戯言を申しておるのか。おぬしのような金の亡者など、姫君が相手にする訳がなかるうが！」

ピンガじいが熱くなればなるほど、ヴィンレットは楽しくて仕方がないようだ。有閑貴族とは所詮こんなものである。

「しかし、アイツにジル殿の相手が果たしてつとまるのか……見もんですね。しばらく退屈しないで済みそうだ。ハハハハ」

ヴィンレットの軽快な笑い声が、執務室内に響き渡った。

その明るさとは裏腹に、ロビン少年の心は暗く沈む一方だ。

「それは……言わないでください、アイゼン公。確かに先は思いやられますね」

深い深いため息が、ロビンの口から吐き出されていく。

苦勞するのはいつだって自分であることを、ロビンは自覚してい

た。

ニール様も、アイゼン公も、そしてこのじじいも。

歳を感じさせないこの熱血ぶりは、もはや尊敬ものだ。

「ええい、陛下はどこへ逃げられたのやら……こうしてはおれん、皆のもの、陛下を捕らえたものには金貨十枚。首に縄付けてでも引っ張ってまいれええーっ！」

ピンガじいのしゃがれ声が、再び新宮の回廊にこだました。

その頃、渦中の皇帝陛下・ニールセンは。

「見えぬ。何も見えぬぞ」

ロビン少年から無理やり剥ぎ取った宮廷御用人の淡い灰色の服を身につけ、日除けの帽子を二つ重ね、ニールセンは重い足取りで石畳の上を歩いていった。

宮殿へと続く街道は、もはや人で溢れかえっていた。

一人で城下に出るなど、初めてのことだった。このような人ごみの中など、経験したことはない。

ニールセンは袖で口元を押さえ裏通りへ抜ける小路へいったん退避した。

「なんと淀んだこの空気……目眩がするわ」

ぜいぜいと、呼吸するのもままならない。

奇妙なおいがする。

道端にずらり軒を並べる屋台やら露天商やらが、その場で作る食べ物のおいだ。

一人の子供が、屋台に走りよっていく。

ニールセンはじつとその様子を物珍しげに眺めていた。

薄くのばした生地を鉄板で焼き、それを紙に載せ、果物を包み込んで、出来上がり。

銅貨一枚と交換。

子供は紙を上手く剥ぎ取り、器用にその食べ物にかぶりついた。そしてそのまま歩き去っていく。

「歩きながらものを食べるなど……信じられぬわ。しかも毒見もせずいきなりガブリとな？ どうなっておるのだ」

ニールセンはもう我慢ができなかった。

気がつくのと、ふらふらと引き寄せられるようにして屋台の前に立っていた。

「いらつしゃい。おや、お役人様。いかがなさいましょう？」

店主はニールセンの身なりを見て、宮廷御用人であるとすぐに分かったらしい。まさか皇帝陛下であるとは、もちろん気付いていない。

「今しがたの子供と同じものをくれぬか」

そう告げると、店主はあつという間に生地を焼き上げ、果物を挟み込み、簡単に紙に包んでくれる。

「1キュールになります」

「今は持つておらぬ」

店主はニールセンの言葉に驚いた。

「それではこれはお売りできねえです。申し訳ありやせんなあ」

いくら役人であっても、特別扱いすることは出来ない。この帝国は厳正なる法治国家だ。物と貨幣が引き換えされなければならぬのは法律で定められている。

しかし、皇帝のニールセンには、そのような一般常識は通用しない。

「そんな……どうしても食べてみたいのじゃ。お金とやらが必要であれば後で持つてこさせるゆえ」

「困りますなあ。あんまりしつこくされると衛兵に通報しますぞ」

店主は半ば困り顔。面倒は起こしたくないのだろつ。衛兵という言葉を出して、ニールセンが引き下がるのを期待しているようだ。

皇帝、理解不能。

「そんな。どうしてなのじゃ？ そこにものがあるというのに。ないものをねだっている訳ではないのだぞ？」

それはまるで幼い子供の疑問のように。しかし、店主からの答えは、ない。

そのとき、突然。

ニールセンの目の前に金貨が降ってきた。カウンターの上を緩やかに転がり、やがて止まった。

「まだ、足りませんか？」

女の声だった。

頭からすっぽりとローブに身を包んでいる。顔は半分以上隠れていたが、立ち居振る舞いは、随分と若さを感じさせた。

店主はおどおどしながら答えた。

「い、いや……金貨一枚で、一万個は買えますぜ。あいにく釣りが……せめて銀貨でしたら」

「釣りなどいりません。ではこれにて」

颯爽と現れ、悠然と去っていくローブの女性を、ニールセンはただ呆然と見送っていた。

手には果物の巻き菓子を握り締めたまま。

表通りから流れてくる歓声が次第に大きくなる。

もうすぐ、皇后の乗ったお輿の行列が、ニールセンの側を通過しようとしていた。

皇帝微笑（3）

「待つてくれぬか」

ニールセンはせいぜいと必死に呼吸を繰り返し、金貨を置いていったローブの女を命がけて追いかけた。

その距離わずか五十歩足らず。運動不足にもほどがある。

しかし、それは仕方のない話だ。

生まれながらの皇帝にして幼き頃より病弱とくればこつという人間に育つ、という見本の完成形なのであるから。

青白い顔に、次から次へと流れ伝う汗の雫。

「まーてーと、いーうーのーが、わーかーらーぬーのーかああっ！」
足は歩を進めることにおもりがひとつずつ増やされていくような感覚におちいつていく。

やがてニールセンは膝をがくりとつき、その高貴な身体は地べたへ転がった。

生ける屍と化したニールセンのもとへ、追いかけていた女の方から戻ってきた。

あまり関わりをもちたくなさそうにしていたが、大声を出され拳句に倒れてしまわれては始末におえない。しかも、思い切り道の真ん中だ。裏通りとはいえ商人の荷車の行き交いは多い。

ローブの女は急いでニールセンを起き上がらせる手助けをし、荷車の往来に邪魔にならないように路肩へ腰掛けさせた。

「あ……あとで返しに……まいらせるゆえ、す……住まいを……教えてくれぬか」

息も絶え絶えに、ニールセンは必死に訴えた。もう逃がすまいと女のローブの袖をぎゅうと握り締める。

すると女は、事も無げに言ってみせた。

「住まいなどございません。お金のことなら心配なさらずともよしいのです。お金は使ったためにあるのですよ。しよせん、ただのハガネの固まりではありませんか？」

「おぬし、良いことを言うの。ただのハガネの固まりとな」

自分を救ってくれた名も知らぬ通りすがりの女に、ニールセンはひどく共感を覚えた。

当然だ。

この国のすべてのものが手に入る皇帝には、貨幣の価値など無用であるのだから。

しかし皇帝であることを隠せば、屋台の焼き菓子ひとつ手に入れることはできないのだ。

ニールセンは自分の不甲斐なさに、もはやため息しか出てこない。「ああ、皇后が行ってしまう。これではここまで来た意味がないではないか」

既に表通りの歓声は遠ざかりつつある。もうじき婚礼の儀が行われる宮殿前の広場へ入っていくところだろう。

結局のところ、当初の目的だった「皇后の下見」はまだできていない。裏通りでもたもたしているうちに、あつという間に行列は過ぎてしまった。

一人で城下に出るということは、こんなにも大変なことだったとは。

ニールセンは額の汗を土のついた手でぬぐった。白く透き通った気高き顔に薄っすらと泥のあとがつく。

その様子を興味深げに見ていたローブの女が、ニールセンの隣にゆっくりとひざまずいた。

「……あれは偽者ですよ」

女はニールセンの耳元でささやくように言った。

「なんと？ 偽者とな！？ なぜなのじゃ？」

ニールセンは大袈裟に飛び退いてみせた。自分のもとへ輿入れするはずの姫君が「偽者」だと言われては、混乱しない方がどうかし

ている。

「あなたは、城の中で仕えている者ですか？」

ニールセンの動揺っぷりが気にかかったのであろう。女は更に尋ねてくる。

「余……わ、私はニールセン様のそばにおるものじゃ」

一応取り繕ったつもりだったが、その効果は果たしてあっただろうか。どうも語尾が皇帝モードから抜けきれていない。

「では教えていただけませんか。皇帝はどのようなお方のです？やはり金の亡者なのですか？」

はて。皇帝とな？

どうやら自分のことを聞かれているだと、ニールセンは弱いおツムで何とか理解した。

しかし、その理由が分からずにウウム、と首をひねってみせる。

「モウジャ？あまり難しい言葉を使われても分からぬ。お金のことは大臣に任せてあるゆえ、よう分からんぞ？おぬし、盗賊か？」

女はニールセンの言葉に面食らったようだった。

宮廷御用人のなりをしている青白い顔の若い男に、盗賊呼ばわりされるなど いや、それより何より服装に合わぬ言葉遣いに、女は疑問を持ったようだ。

すでに疑問は確信に変わっているに違いなかった。女は訝しげにニールセンの顔を見つめてくる。

「……あなたはいつたい、ここで何をしておられるのです？」

女の言葉遣いが幾分丁寧になったことに、ニールセンは気付いていなかった。

「皇后の顔を、そばで見たかったのじゃ」

素直にそう告げた。皇帝は、世渡りや駆け引きなどとは無縁の間である。

その純真爛漫な言葉を、ローブの女は黙ったまま聞いていた。

「まさか偽者を送ってくるとは思わなかったゆえ……しかし、余はその気持ち分かるぞ」

「どうしてですか？」

「このような異国の地に一人で参られるは心細きこと。何をされるか分かったものではないではないか。影武者を仕立てたくなるのも当然である？」

そう言つて、ニールセンは自虐的なため息をついた。

へこむ。へこまずにはいられない。

知らず知らずのうちに、皇后に対する期待があまりに大きく膨らんでしまつていたのだ。

借金のかたに結婚をする そんなことをバカ叔父ヴィンレットが言つていた。

そんな境遇の人間が、ニールセンのことを気に入るかどうかなど、重要なことではないのだ。

一人勝手に舞い上がつていた自分自身を、ニールセンは恥じた。

まさか、向こうも影武者などと。それほどまでに。

はああ。

何度目かのため息をついたときだ。

突然ローブの女が、こらえきれないといったように笑い出した。

「では、どうして陛下はここにおられるのです？ ここはあなたにとって異国の地でもない、居城なのでしょう？ それなのに影武者を？」

女はまだ笑い続けたままだ。

ニールセンは訳が分からない。なぜこの女が自分のことを笑つているのか。

「余の命を狙うものは大勢おるのだ。……………お、おぬし、いま」

陛下』とな！？」

気付くのが遅すぎである。

当のニールセンは自分の素性がばれていたことにあたふたし、目が左右に泳いでいる。

自分が皇帝だと分かれば、共の者もおらぬこの状況で、暗殺の危険度は最大値だ。

ひいいと、声にならない悲鳴をひとしきり上げ、ニールセンは四つん這いになって這い逃げようとした。

あまりに情けない姿だ。

女はようやく笑うのを止め、顔を覆っていたローブのフードを取った。そして、気品あふれる声を辺りに響かせる。

「まだお分かりになりませんか？ ジル・マイシエルと申します、陛下。初めまして」

なんともはや。

ニールセンは初めて、あのいけ好かぬ叔父ヴィンレットの言い分に納得した。

絶世の美女と誉れ高き　これは納得せざるを得ない。

「おぬし……いや、そなたが！？ そなたが、余の皇后とな？」

ニールセンは女の呼称をとっさに変えた。

まさかこれほどまで美しいとは、ニールセンは予想していなかった。

まだ、少女だ。決して幼いわけではなく、しかし成熟した美しさでもない。

皇帝、完全に心を奪われた。あっけなく、陥落。

もちろん、見目麗しきこともさることながら、その浮世離れた価値観が似ていることが、ニールセンの心を捉えたのだった。

しかし。

持ち前のとことん後ろ向きな性格は、決して変わることはない。

「……信じられぬぞよ、そんな戯言は。甘い話に取り付くなど、いつもピンガが言うておる」

口づるさいジイの渋い顔が、ニールセンの頭の片隅をよぎっている。

きつといまごろ、逃げたことがバレて、大騒ぎをしているだろう。「ピンガ？ あの大臣様がそのようなことを？ 父上が私を差し出すと申しましたら、条件もろくに聞かずに飛びついたあのお方が？

それはそれは……たいした教育係ですこと」

嫌味を言っているのであるが、それを微塵も感じさせない。

怖いものなしに品格という刃でためらいもなく切り捨てるさまは、まさに痛快だ。

もはやニールセンの心は、ジルと名乗った皇后となるはずの少女に奪われてしまっていた。

「そなたが無理やり連れてこられたような話を、余は今朝がた聞いたばかりなのじゃ。余は、そなたがそんなに嫌がっているとは思っていないかったゆえ……」

「嫌がる……？」

「だから影武者を仕立てて、ここまで逃げてきたのであろう？」

ニールセンは恐る恐るジルの顔をうかがうようにして尋ねた。

皇后となる少女が、自分のことをどれだけ受け入れてくれるものなのか ニールセンは不安で不安でしよがなかつたのである。

「それは、陛下もご一緒なのではありませんか？」

ジルの声は明るく澄んでいた。無邪気に語りかけてくるところをみると、決して悪い印象ではないのか ニールセンの心は少しだけ緩んだ。

「余は、別に嫌がってなど……ただ、余は人馴れしておらぬ。いくら勝手に決められたとはいえ、誰でもよいというわけにはいかぬのだ」

そう言ってニールセンは、自分が皇后となる人に何を求めているのか、ようやく分かった気がした。

そして、それはこの目の前にいるジルという少女が、確実に持っているもの。

「そなたも仕方なく連れてこられたのであれば、……む、無理して余の側におることもないぞ。余の住まいは広いゆえ顔を合わさぬこともできるし、退屈させぬよう欲しいものは何でも与えるし、その、なんだ、ええと……そんな悪いようにはせぬ」

なんとも不器用な愛情表現。しかし、これがいまの皇帝の精一杯なのである。

「退屈させぬと、今おっしやられましたね」

ジルは嬉しそうに、首をわずかに傾げて微笑んだ。

ひととき大きな歓声が、広場の方から湧き上がった。

楽隊の祝祭曲が高らかに演奏され、白い鳥が大空へ羽ばたいていく。

「は、始まってしまったようであるぞ？」

「では、参りましょうか」

ジルは立ち上がり、もう一度ローブのフードを頭にかぶせた。

そして、透き通るように白い美しい手を、ニールセンの方へとさしのべる。

「参るとな？ そなた、いずこへ参られるのじゃ？」

「陛下、ジルを宮殿まで案内してくださいませ」

ニールセンは貧血で再び倒れそうになった。

驚きなのか喜びなのか途惑いなのか　もはや、どれでもあつてどれでもない。

ジルの手を借りてようやくやくまともに立ち上がる。そして、その手をしっかりと握り締めたまま。

「よいのか」

「ええ」

「本当に本当に、本当によいのか？　あとになってやっぱり止めた」と申せば

「申し上げたら、どうなるのです？」

「余はきつと、死ぬ」

若き皇帝ニールセンの言葉に、ジルは優雅な微笑で応えた。城下のじめじめした路地裏で、なんとも奇妙なプロポーズである。そしてここに、若く初々しいロイヤルカップルが誕生した。

偽者たちによる婚礼の儀は、今まさにクライマックス。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6121w/>

皇帝微笑

2011年9月11日21時04分発行